

## 離乳前後の画期的なりキッドフィーダーの開発背景

欧米で改良されている多産系の母豚はたくさんの子豚を産みます。しかしどの子豚も大きく育てられるわけではなく、事故率が15%以上に達することもあります。つまりたくさん産んでもたくさん死んでしまうのです。こうした課題を解決する画期的なフィーダーがミルクィーウィーンフィーダーです。しかしもともとは子豚への効果的な餌付け、そして離乳以降の落ち込みをできる限りなくすことから開発されたものです。

離乳は子豚にとって最初で最大の難関です。良い乳頭が当たらずにひもじい思いをしている子豚は、かえって分娩舎で餌を食べる習慣を身につけないと生きていけません。逆に比較的大きな子豚は母乳に頼り切り分娩舎ではほとんど食べないのも普通です。離乳は、①母豚から離される、②栄養を自分で取らなければならない、③見たこともない連中と同居する(大きな群になればなおさら)、④環境が変わる(温度や換気など)、⑤お母さんの免疫から自力で免疫を作らなければならないなど、条件がいくつも一度に重なり、私たちが想像している以上にストレスを受けます。したがって通常の離乳子豚は最初の1週間でほとんど体重が増えないばかりか、中には減少して病気の侵襲(この時期下痢が最も怖い)を受けやすくなります。管理者の気まぐれな給餌(一日2-3回)のお陰で、無理やり餌を食い込まなければならない豚はおそらく過食から下痢を起こします。これが離乳直ぐに見られる下痢の第一原因です。自分で好きな時に好きなだけ食べられるミルクィーウィーンフィーダーなら全く問題ありません。個々の調子に任せておけば、お腹が太鼓腹のようにもなっているにもかかわらず下痢はほとんど見られません。下痢をすると腸の免疫が不調で、今度は呼吸器病の洗礼を受けやすくなります。しかしそのほとんどは離乳前後の餌付けの方法に本質的な問題があったのです。

ミルクィーウィーンフィーダーは当初、20日令くらいの子豚を30日くらいまで、つまりスムーズな餌の切り替えができるよう開発された特殊フィーダーでしたが、むしろ多産系の母豚の導入で、生後数日までに運命が決まってしまう発育不良・虚弱豚を救えるのではないか、この方がはるかに理にかなっているのではという発想から、お湯を出す仕組みを搭載してバージョンアップされました。一方その後継機としてお湯は必要ないがもっと丈夫で離乳舎移動子豚から導出時まで長い間管理ができる後継機が登場しましたが、こうした目的(哺乳期後半から離乳全般の時期)でもミルクィーウィーンフィーダーは全く問題なく使用できることも分かってきました。離乳前半の数種類の餌の切り替えは非常に重要です。ミルクィーウィーンフィーダーで分娩舎から食べることに慣れている子豚は、離乳後も何ら問題なくスムーズに移行できるのです。ミルクィーウィーンフィーダーは以上の二つの目的に合わせ、①分娩舎で早期に、②離乳舎でじっくりと、それぞれの農場のニーズに合わせてお使いいただけます。皆さまの期待にこたえられる特殊ナースフィーダーとして今後も自信を持ってご提案したいと思います。